

阿嘉島の蝶 part9

イシガケチョウの生態

上林 利寛
AMSL 調理担当

Butterflies in Akajima Island, Part9
Ecology of *Cyrestis thyodamas* (Boisduval)

T. Kamibayashi

照りつける日差しのある夏の日、島内のダイビングショップから「珍しい蝶がいるので見に来てほしい」と電話を受け、急いで向かいました。店先の水撒きされたばかりの土の路面には、張りつくように翅を広げ、微動だにしない一匹のイシガケチョウ(タテハチョウ科)の姿がありました。

本種は南西諸島では普通に見られる蝶ですが、本土では本州の南西部、四国、九州に分布が限られるため、東日本以北では珍しい蝶ということになるでしょう。この蝶の翅は白地に道路地図を描いたような模様で、英名で「マップ・バタフライ」と呼ばれ



図2. イヌビワ葉上の終齢幼虫
幼虫の形状は、頭部に1対の角状突起と背面に2本の肉質突起がある。若齢時の体色は茶色だが、生長するにしたがって、鮮やかな黄緑色になる。

ています。遠くからこの蝶を見ると、翅の輪郭が明確でないため、土の路面やジャリ道の上に翅を広げていると、紙屑のように見えるので、カモフラージュの効果があるのかもしれない。

本種は阿嘉島ではほぼ周年(冬でも晴れて気温の高い日には)、林間を滑空しながら飛ぶ姿を観察することができます。成虫は特に白い花を好む傾向があるようで、ダイコンやニンジンの花、そして畑の隅に群生するタチアワユキセンダングサの花などでよく吸蜜します(黄色い花をもつカラシナやブロッコリーでは見たことがありません)。また、ニンジンの花とタチアワユキセンダングサの花が混在する場所



図1. ガジュマルの若葉に産み付けられた2つの卵
1999年6月5日午前9:45頃、偶然ガジュマルの若葉に卵を生みつけるイシガケチョウを発見し、枝ごと卵を持ちかえる。3日後の6月7日夜8~10時の間に、この2つの卵が孵化した。

では、5~6匹の集団が後者には目もくれずニンジンの花だけに群がっていることがありました。このことに限れば、彼らにとって特にニンジンの花は魅力があると言えるでしょう(他に動物の死体や糞にも集まり、湿地で吸水することもあります)。

幼虫の食樹はガジュマル(クワ科)やイヌビワ類(クワ科)で、若齢時には葉の先端の中脈を食べ残し、そこに自ら排泄した糞で塔を作る習性があります。なぜ、このような摂食および排泄を行うのかは不明ですが、本種の幼虫を探す場合、多く自生する食樹の中で、この独特な食べ痕が手がかりになることが多いのです。



図3. ニンジンの花で吸蜜する成虫
外見で雌雄の判別は困難だが、雌の中には翅の地色が淡褐色のものがある。1999年6月初旬の飼育では卵期3日、幼虫期9~10日、蛹期6日という記録だった。